

D. H. マグレガーの有機的成長論批判

下 平 裕 之

はじめに

本稿は、D. H. マグレガー (1877-1953) がその著書『産業の進化 (*The Evolution of Industry*)』(1911)において展開した、有機的成長論批判を取り上げる。マグレガーはケンブリッジ学派の創始者であるアルフレッド・マーシャルの直接の弟子の一人であり、1904年トリニティ・カレッジのフェロー、1908年リーズ大学教授、1919年マンチェスター大学教授を経て1922年から45年までの長きに渡りオックスフォード大学教授を務めた人物である。

マグレガーの主な研究領域は産業経済学であり、1906年に出版された最初の著作である『産業合同 (*Industrial Combination*)』は、当時の産業組織論に関する主要な研究として高く評価されていた。本稿で取り上げる『産業の進化』はそれに続く著作であり、近代産業社会における産業組織の発展の原因と問題点、またそれを改善するための雇用制度の改革や産業統治の新たな手法に関する議論が行われている。

『産業の進化』において展開されていた産業統治論については下平 (2009) において既に扱っているが、これはケンブリッジ学派の産業統治論の展開に関する一連の研究の一端として取り上げたものである。本稿で問題とする有機的成長論に関する批判は、同書における産業組織の発展に関連した議論において展開されており、したがってこれまでの一連の研究の補足的な役割を果たすものである。

またマーシャルの有機的成長論は近年経済学史のみならず産業組織論や進化経済学の領域でも脚光を浴びているテーマであるが、マグレガーが20世紀初頭に早くもこの問題を取り上げ批判を行っていることは注目すべきことであり、その意義を検討することは有機的成長論の研究に関し多少なりとも貢献するものと思われる。

本稿の構成は以下の通りである。まず 節でマグレガーの有機的成長論批判を理解するための前提となる、マーシャルの有機的成長論について論じる。これを踏まえ 節ではマグレガーが『産業の進化』で展開した有機的成長論批判を、特に大規模組織の発展とその問題点を軸に考察する。そして 節において彼の批判の特徴と意義を明らかにする。

マーシャルの有機的成長論

マーシャルは『経済学原理』（以下『原理』）において経済学を「経済生物学」として展開しようとしていたことが、近年のマーシャル経済学研究の中で明らかにされている。これまでの研究によれば、彼の「経済生物学」構想は、当時発展してきた進化論的視座に基づく「有機的成長」論の中に具体化されていたと考えられている。特に彼が進化論的視座に基づいて議論を展開した部分として、『原理』第4編第8章「産業組織」と、第6編「国民所得の分配」が言及されることが多い。そこで本節では、マグレガーの有機的成長論批判の前提となる、マーシャルによる有機的成長論の内容について簡潔に説明する¹。

1 産業組織の高度化と有機的成長

マーシャルは、『原理』第4編第8章において、発展していく分業体制とそこでの労働熟練や知識の発達・普及にもとづく機械化の進展や交通機関の発達がもたらす結合性の高度化によって「収穫逓増」の生産力が実現されていくことを示した（岩下 2001, 3）。ここにおける彼の議論の特徴は、これらの所論を当時の生物学や社会学における進化論的認識に基づいて展開していることである。すなわち彼は、産業組織の成長・発展を有機的な成長・発展としてとらえている。

マーシャルはまず冒頭においてアダム・スミスの分業論を取り上げ、経済学者が分業のもたらす生産力効果に早くから着目していたことを指摘する。

プラトンの時代以来、社会科学について論ずる人々は、組織によって労働が獲得する能率の増大を好んで主張してきた。しかしアダム・スミスは、他の問題におけると同様、この問題においても・・・新たな、より大きな意義を与えた。スミスは分業の持つ有利性を強調し、それが、限られた土地で、増大した人口が安楽に生活することを可能にしていることを指摘したのち、人口の生存手段に対する圧迫が、組織の欠如によるかあるいは何らか他の原因によって、彼らが生活している地域の持っている利点を最善に活用することができない民族を、滅亡させる傾向があることを主張した²。（Marshall [1890]1920, 240）

一方 19 世紀における生物学の発展は、動植物界における生命体の進化の問題を取り扱う手法の発展をもたらした。その結果経済学者は「一方においては社会組織とくに産業組織と、他方

1 本節の説明は、マーシャルの有機的成長論に関する最近の研究（岩下（2001, 2008）、坂口（1990）、西岡（1997）、西沢（2007））に依拠している。

2 『原理』の訳文は Marshall ([1890]1920) の長澤訳を参考としているが、一部従っていない箇所もある。

においては高級な動物の身体の組織の間に発見された、多数の深い類似性によって、多くの恩恵を受けるようになっていく」(Marshall [1890]1920, 240-241)。そして産業組織と動物の身体組織との間には、「社会的有機体であると自然的有機体であるとを問わず、その発展においては、一方においては個々の部分の間における機能の分割の増大と、他方においては個々の部分の間の緊密な結合が進行する」(Marshall [1890]1920, 241) という類似性が存在することを明らかにした。

マーシャルは、有機体が発展し高度化していくにつれて以下のような特徴が明確になってくることを指摘した。

おのおの部分はますます非自足的となり、その生存は他の部分にますます多く依存するようになる。そのために高度に発達した有機体においては、いずれかの部分に生じた何らかの混乱は、他の部分にも影響を及ぼすようになる。(Marshall [1890]1920, 241)

これはすなわち、有機体を形成している各部分の相対的自律性と各部分の相互連関の緊密性の増大が、有機体高度化に共通する特徴であることを意味している(岩下 2008, 68-69)。

その上でマーシャルは、このような「機能の分割」とそれらの「緊密な連合」という有機体の特徴を「分化」と「統合」という概念でとらえ³、これにより近代社会における産業組織の高度化の特徴を次のように表している。

機能のこのような分割の増大すなわちいわゆる「分化」は、産業に関しては、分業および特殊な技能、知識、機械の発達という形をとり、また「統合」すなわち産業上の有機体の各部分間の結合の緊密さと堅固さの増大は、商業上の信用の安全性の増大、海洋と道路、鉄道および電信、郵便と印刷機といった交通の手段や慣習の増大という形をとる。(Marshall [1890]1920, 241)

ここでマーシャルは大規模組織が発展してきたメカニズムを、有機体の高度化と同一視する形で有機的成長として描いていることが理解される。

2 人間的進歩を軸とした有機的成長

マーシャルは『原理』第6編「国民所得の分配」において、国民所得の量的増加だけでは

3 ホジソンは、ここでマーシャルが進化の進展は分化と統合の結合を伴うという、ハーバート・スペンサーの中心的な考えを再現していることを明らかにしている。「スペンサーやアダム・スミスと同様に、しかしチャールズ・ダーウィンとは異なって、多様性は社会的・経済的・生物的発展の結果として認識されているのであって、その主たる原因とはみなされていない。また、明らかにマーシャルは、自然科学と社会科学の統一というスペンサーの考えを複製している」(Hodgson 1993, 103 訳 157)。

なく、生物有機体の進化過程と同等に見なされる、社会や人間の質的向上を伴う累積的過程としての「有機的成長」のプロセスを描こうとした。彼の有機的成長論を解明する際に鍵となるのは、欲望と活動、安楽基準と生活基準という互いに密接した概念である（坂口 1990, 221）。

人間の発展の最も初期の段階において人間の行動を喚起するものは人間の欲望であったが、後の段階においては「新たな欲望が新たな活動を喚起するよりは、新たな活動の発展が新たな欲望を喚起する方向に作用することを認めなければならない」（Marshall [1890]1920, 89）。そして彼は「経済進歩の要諦は、新たな欲望の発展ではなく、新たな活動の発展にあると考えべき」（Marshall [1890]1920, 689）であると主張している。

活動の基準を左右する大きな要因の一つは生産要素としての労働者の質・能率である（坂口 1990, 226）が、マーシャルは労働者の質的向上の重要性を強調するために「生活基準 (standard of life)」と「安楽基準 (standard of comfort)」という概念を導入する。

生活基準という言葉は、ここでは、欲求に対して調整される活動の基準を意味するものとする。したがって、生活基準の上昇は、支出において注意と判断の増大に導き、食欲を満たすだけで、体力を強化することに役立つことのない飲食と、肉体的ないしは道徳的に不健康な生活の様式を避けるように導く、知性と精力と自尊の念の増大を意味するものとする。（Marshall [1890]1920, 689）

しかし、多くの著者は、生活基準ではなく安楽基準が賃金に与える影響について語ってきた。安楽基準という言葉は、おそらくは粗野な欲望が支配的であるかもしれない、人為的な欲望の単なる増大を示唆する言葉である。（Marshall [1890]1920, 690）

有機的成長を促進するのは「生活基準」の向上であり、その向上は人間の肉体的・知的・道徳的な向上を含んだ人間そのものの進歩を表わす概念であって、経済的進歩が人間的進歩を生み、それがさらに経済活動を上昇させて経済的進歩を引き起こしていくという累積のプロセスの中心に位置する概念である（坂口 1990, 227）。そして生活水準の向上のために、マーシャルは高賃金とそれによる家庭や教育環境の改善を重視している⁴。

ある世代の労働者によりよい稼得を与える変化は、彼らが持つ最良の性質を発展させるよりよい機会を与えるのみならず、彼らの子供たちにそのような機会を与える力を強化する、物

4 マーシャルは経済的進歩の過程における企業組織の重要性も強調している。高賃金を実現する前提として、その源泉となる優れた企業組織が生み出す「複合的準地代」の増大が必要とされている。また労働者の「生活基準」の向上を要請する一方で、企業組織活動の主体である企業家・資本家階層が「経済騎士道 (economic chivalry)」とも言える意識・嗜好態度を持つことを求めた。詳細は岩下 (2008, 第5章) 参照。

的ならびに道徳的な利益を増大させるであろう。他方では、そのような変化は、彼ら自身の知性、知恵、先見性を増大させることによって、子供たちの福祉のために彼ら自身の快樂を犠牲にする意思をある程度増大させるであろう。(Marshall [1890]1920, 563)

そして生活基準の向上は労働の質や能率の向上を生み出し、その結果としての国民分配分の増大、そしてそれに伴う賃金の上昇とさらなる人間的進歩を生み出すだろう。

全国民の生活基準の上昇は、国民分配分を大幅に増大させ、おのおのの等級と、それぞれの職種に属する分配分の分け前をも増大させるであろう。任意の職種ないしは等級にとっての生活基準の上昇は、彼らの能率を高め、それゆえに、彼ら自身の実質賃金を増大させるであろう。(Marshall [1890]1920, 689)

こうしてマーシャルは生物学的進化と同等と見なされる、人間的進歩と経済的進歩が累積的に進行する有機的成長の過程を明らかにしているのである。

ここまでマーシャルが展開した2つの有機的成長論について概観してきたが、これを踏まえた上で次節において、マグレガーがどのように有機的成長論に対する批判を展開したのかを確かめて行く。

マグレガーの有機的成長論批判

マグレガーが有機的成長論批判を展開しているのは、『産業の進化』第2章「近年における産業の変化」においてである。この章は、有機的成長論が経済学において展開されることになった前提としての産業構造の変化（合同と専門化）や経済思想の変化について議論を行ったうえで、大規模産業の発展を説明する理論としての有機的成長論に言及するという構成になっている。本節ではこの構成に従い、まず産業構造の変化と経済思想の変化に関するマグレガーの見解を確認し、続いてその有機的成長論批判を検討する。

1 合同と専門化

19世紀のイングランドほど、大きな発明の影響が産業や社会生活の双方にはっきりと影響を与えた時期はない。イングランドにおける産業革命は、国民の生活を古いものから新しいものへと明確に区分した。国民は階層化されたが、それは主に産業革命と分業に明らかに依存している。社会生活は産業制度の創造物であった。

大きな発明が工場に対して与えた影響とは、手作業とそれを補助する機械との関係を変化さ

せたことであった。かつて道具や機械は人間の手の支配下にあり、労働者が力を供給し道具はそれに従っていた。しかし大きな発明が生じた後は、近代的工場における労働者の地位は、むしろ機械を補助するものとなった。

ワットやクロンプトン、コートによる発明以前にも工場は存在したが、19世紀の「工場制度 (Factory System)」が意味することは、労働者が機械に従属することであり、長年にわたる歴史的变化を見た場合に革命による影響というものを正当化するのは、まさにこの変化なのである。(Macgregor 1911, 40)

マグレガーはここで19世紀における産業発展の歴史を説明する鍵となる概念を求めているが、彼が特に重視したのは「権力 (power)」⁵であった。権力という理想を獲得する手段は、合同 (Combination) であり、これは19世紀というものを決定的に特徴づけるものであった (Macgregor 1911, 43)。1800年における労働問題に関する著者は、その研究の単位として個々の労働者を扱っていただろう。賃金率の決定は、労働をめぐる自由かつ独立した個々人の交渉に依存していると見なされていた。

しかしこの世紀の間に、労働に関する研究は自由な労働者の (ますます大きくなる) 団体組織に関する研究となり、その結果交渉や競争は個々人の力ではなく、連帯した力に依拠するようになった。またこの世紀における資本主義の歴史をみれば、家内労働や職人労働は次第に重要性を減じ、その代わりにパートナーシップから株式会社、さらにはトラストが主要な役割を演じるようになった。さらに人々の生活の態様を見た場合にも、大都市への人口集中が進み、また新たな機械設備を十分に利用する能力を得るために労働者の集約が進んだ。

このような組織の規模の拡大は、特徴的な経済的事実である。イングランドではこれらの発展を生み出した諸力は、他のどこよりもおそらく強いものであった。(Macgregor 1911, 43)

合同に向かうこの傾向は、全般的には良いものと考えられていた。国民生活や産業の領域で合同が進行しつつあるという事実は、近代的な産業制度が経るべき一段階であると捉えられていた。19世紀の合同運動は、国民経済や世界経済の適切な発展にまさに必要とされていた、競争や産業組織の統制にある種の役割を果たしていた。

一方ここで忘れてはならない点は、「これまで述べてきたあらゆる合同形態の内部では、次

5 「19世紀の基本的理念は、権力である。国民経済は、この理念の下で動いてきた。人口の成長や経済的資源に対する圧力、政治的権威などの要因により、経済的・政治的組織において何よりも権力を求めることが目的となった。」(Macgregor 1911, 41 - 42)

第に大規模な専門化が進行していた」(Macgregor 1911, 46) ことである。1つの産業はますます大きな組織へとなっていたが、その内部ではしだいに部門や機能あるいは活動の分化がますます進行していった。個々の産業における労働の分業あるいは専門化は、それらの組織がますます統合されていく過程と同時に進行している。

したがって、次のように言うことができるだろう。すなわち、19世紀には合同を通じた経済的権力の獲得という理想が現れていたが、それは同時にますます高度な労働の専門化の進行を常に伴っていたのである。(Macgregor 1911,47)

2 経済思想の変化 合同の容認

経済思想史および社会思想史は、これまで見てきた歴史的変化と同じ線で発展してきた。世紀を通じて「個人主義」と呼ばれる理念から、社会主義と見なされる理念へと次第に変化が見られた。この動きは19世紀における偉大な思想家の姿勢の変化を取り上げることによって観察できるだろう (Macgregor 1911, 47)。

国家の産業問題に対する姿勢は、最初には一種の不介入あるいは自由放任であった。一部は単なる保守主義によるものであったが、また一部はアダム・スミスとその後継者たちの教えが大きな影響を与えていた。

しかしながら忘れてはならないことは、スミスは自由という概念を自身が生きていた当時の産業組織に対してのみ適用していたということである (Macgregor 1911, 51)。彼は大規模な産業構造の変化が生じる前に亡くなった。スミスが生きていた当時は、産業の問題を考える際の基本単位は個人であった。さまざまな個人の自由を主張する際に、彼は拘束からの自由のみを求めている。個々の労働者や雇用者のみにその教義は当てはまるのだが、それは産業における大規模な変化がまだ生じていなかったからである。その当時の主な経済的自由の種類は、独立する自由と(労働者であれ雇用者であれ)自身を守るために戦う自由であった。

しかし自由放任という理念を19世紀において生じた新たな条件に適用するならば、それは個々人が競争する自由と同様に合同する自由をも意味することになっただろう。経済的単位は変化し、また19世紀において個人の自由に対する真の制約となっていたのは、労働者が労働組合に加盟し、投資家が株式会社を設立し、そして企業がトラストを作るなど、こういった行動を妨げることであった。自由放任の意味は変化したのであり、それはそのような理念が適用される経済の構造が変化したからである (Macgregor 1911, 51-52)。スミスの時代(そして19世紀初頭の彼の後継者たちが生きていた時代)には、自由競争と自然的体系が意味していたものは、個人間の自由な競争と彼らの独立性であり、それ以上のものではなかった。

19世紀初頭に生じた経済環境の変化に対する抵抗の大部分は、環境が変化したにもかかわらず

らずスミスの自由という理念を適用したために起こった。都市や工場、そして経済体系内における人々の集団化の進行により新たな種類の自由、すなわち合同する自由が求められるようになったが、当時はスミスの見解に基づき自由がという概念が理解されていたため、労働者の団結や法による産業への介入に対し長期間にわたる抵抗が生まれたのである (Macgregor 1911, 52)。

19世紀の半ばに至るとともに、偉大な思想家たちの見解は変化してきた。J. S.ミルは自身をスミスとその後継者たちの伝統的な政治経済学の解説者であると考えていたが、ミルの著作には経済的变化の影響を通じて、社会という概念が経済学説に行き渡ってきたことがはっきりと示されている。ミルの学説はその後継者たちに大きな影響を与えた。カーライルやラスキンまたキリスト教社会主義者たちは、合同という概念を民衆に関する研究から導き出し、1850年代以降にはイギリスにおける経済学説の主流は、社会という概念と連帯 (association) の精神に基づくものとなった (Macgregor 1911, 53)。

そして19世紀末には連帯という概念が支配的になったのみならず、集産主義と呼ばれうる理念が現れてきた。この時期には、産業合同や連帯という手法がどの程度まで実現可能かという問題が考察の中心となっていた。世紀の初めには合同を擁護するための意見が求められていたが、世紀末には為政者や学者が考慮すべき問題はその動きを指導することとなった⁶。

3 大規模組織の発展と有機的成長

西洋文明の発展は、組織の大規模な合同化と専門化を伴いながら進んできたことを見てきた。労働と資本は共に、支配力を確保する目的でより大きな単位で組織化された。しかしこれらの組織の内部では、部門や機能の分化や専門化が大幅に拡大した。この結果として、特に労働者の間に数多くの等級 (または階層, 階級) が形成されてきたが、これは彼らが就いている仕事の性質に依存するものである。ここでマグレガーは、このような機能の専門化が次のような問題を引き起こしたと考えている。

最も効率的に仕事を進める上で必要な専門化が進むにつれて、1つの産業を構成する労働者の集団内に数多くの小集団が構成される。それらはそれぞれが高度に専門化されているため、個々人が1つの労働部門から他の部門に異動することは困難となる。[労働に関する] 多くの問題は、この種の専門化から生じている。(Macgregor 1911, 55 [] 内は引用者による)

6 「1800年における自由放任 (laissez-faire) とは、次のような意味を持っていた——自分自身で競争するために、個人を自由にせよ。世紀の半ばになると、その意味は次のように変わってきた——労働者や使用者たちが連帯することを自由にせよ。そして世紀末には全く同じ表現が国家に対して用いられ、それは次のような意味を表していた——国家もまた自由にせよ、国家ができかつなすべき事業があるならば、それを国家にさせよ。」(Macgregor 1911, 54)

不況期や新たな技術的発明が産業に適用される場合に、これらの問題が現れてくる。仕事を失った労働者が（賃金水準で考えた）同じ等級の仕事を得ることは容易ではなく、また異なった集団間にもこの議論は当てはまる。また、現場労働者と監督者を分け、上級監督者と投資家を分けるといった境界線も存在する。産業の大規模化がこのような境界を生み出したのであるが、それは高度な専門化は労働の効率化をもたらすからであり、そして大規模産業においてのみ多様で専門化された労働が可能となるのである。

合同という手段により権力という理想を追求した19世紀において、人々の階層化と階級化は大規模に進行したのである。そしてマグレガーはここで「特定の機能に高度に専門化した、極めて多様な部分から構成される大規模組織」(Macgregor 1911, 56)が発展してきたプロセスを、有機的成長 (organic growth) として捉えている。

さて、この種の成長は通常有機的成長と表現される。生命体がより高度な形態へと変化するにつれて、部分や機能の細分化がますます進むと同時にそれぞれがますます統一性を持つようになる、ということが観察される。高度な有機体が下等な有機体から生まれてきたということは、次のような事実から説明される。すなわち、それらは一つの高度な中枢に結び付けられ、またその構造は全く同じ形態を取ることを止め、特殊な感覚や活動を行う特殊な器官に発展してきた。同様に、産業の成長は経済活動においてより大きな統一性をもたらしたが、それはまたそれぞれの新たな単位において産業活動の分化と専門化をもたらした。これは各部分の高度な分化と専門化を伴いながら統一性を持った生命体が生じたことを説明する、有機的成長という手法に対応するように見える。(Macgregor 1911, 56)

4 有機的成長概念の問題点

しかしマグレガーは、「近年の産業における成長が有機的であると述べると同時に、我々はそのような結果を正当化していると思われる」(Macgregor 1911, 56-57)と述べ、有機的成長という概念を安易に用いることに警鐘を鳴らしている。

「有機的」という用語は広く認められている印象があるが、我々が経済的進化を有機的進化と同じものととらえて満足したとしても、それは産業に現存する階層化を無言のうちに認めることにしかならないだろう。(Macgregor 1911, 57)

このような極端な専門化はしばしば不満が表明される現代社会の諸側面的一部分にすぎないし、深刻な経済問題を有機体という名称やそれが示唆する結果を用いるという単純な手段により避けることは無益であろう。したがって、「このような発展が果たして・・・本当に有機的なも

のなのかを問わなければ」(Macgregor 1911, 57) ならない、とマグレガーは問題提起を行っている。

彼によれば、生命体が部分や機能に関し高度に専門化するとともに統一化・一元化されている、ということは有機体に関する完全な説明としては不十分である。非有機的な専門化というものも存在しうるかもしれない。現代の産業においては、高度に発展した2種類の有機的成長の形態が存在していることを認めなければならない。まず産業の神経活動と呼ばれうる、高度な統一化が存在する。すなわち集中的な統制がなされ、それぞれの部門が他の部門からの影響に対し鋭敏に反応し、また高度かつ複雑な相互依存関係にある。またさらに、これらの相互依存的な単位の内部では非常に多様な活動が行われていることは確かであり、それは有機的生命体の各部分にも見出されるものである。

しかしながら、有機的生命体に関する完全な理解のためにはもう一つの考えが必要であり、それは循環 (circulation) というものであるとマグレガーは主張している。

有機体 [という概念] は、次のような条件が満たされなければ理想を満たすことはできないだろう。すなわち、単に各部分が共通の中心部に支配されているだけでなく、循環という過程によりそのような生命体が維持されているということを理解することである。

そして、

産業が本当に有機的生命体と同等のものであることを認めるには、生命体が部分から部分への動きを伴うという原理と同様に、産業もまた高度な——あるいはともかくかなりの程度の——移動性という特性を示さなければならない。正にこのような根拠により、経済的進化は有機体の進化と同一視できないのである。(Macgregor 1911, 58 [] 内は引用者による)

産業制度においては部門間における高い移動の自由性は存在しておらず、階級分化を伴う専門化や社会的階層化の度合いはなお非常に大きい。労働は、血液が生物学的有機体における生体であるのと同様に経済的有機体における生体であるが、自由に循環する術を備えていない。自由な循環こそが、19世紀の経済発展において真の有機体の原理が存在していたと主張することを可能とするのである (Macgregor 1911, 58-59)。

高度に専門化された労働者が常に機械により置き換えられつつあることは、疑いのない事実である。しかしながら高度に専門的な仕事を行う者が主に機械の発明により脅かされる一方で、またある産業では、機械の使用により労働者が仕事から仕事へと移動する能力がより高まったということができる。

1つの機械の使用法を学んだ労働者はより容易に他の機械の使用法を習得することができるということはおそらく正しいだろう。しかし同時にまた、機械の操作自体も高度に専門化されるようになることは確かである。専門化によっても少なくとも同じ等級の仕事間を移動することはなお可能となるだろうが、異なった種類の仕事に関しては非常に困難になる。そして忘れてはならないことは、「労働の専門化という問題は同水準の仕事間の移動のみならず・・・ある水準の産業制度からより高度な制度への移動に関しても影響を与える」(Macgregor 1911, 59-60)ということである。したがって、

機械が社会的有機体における労働の循環の増加に何らかの影響を与えとしても、産業制度が真の有機体という概念に至ることを妨げるある程度の階級分化がなお存在することは疑いえないのである。(Macgregor 1911, 60)

事実、産業制度に対しこの種の比喩を用いることには注意しなければならない。結局のところ有機体はそれぞれ独自の生命体ではない部位によって構成される単一の生命体であるが、産業は生命体としての多数の人間から構成される制度であり、また生命体と同等の完全性を備えているわけでない。したがって、

産業が有機的成長と類似している点——高度の専門化と統一性、また極めて密接な相互関係——を強調するだけでなく、生命体に必要な循環の原理という観点から、産業がなお完全な有機的生命体との類似性を十分に示していないということを指摘することが望ましい。(Macgregor 1911, 60)

最後にマグレガーは、このような不完全性は19世紀における産業発展の進行に比して教育の発展が遅れていることに原因があると指摘している。労働者が産業制度の中である地位から別の地位へと自由に移動できる能力は、教育の変化に依存しているが、それは次のような認識に基づくものである。第一に、その能力は労働者がより高い職位に移動するか、あるいは同種の職業における変化に対応することを可能とする技術的能力に依存している。第二に、教育の機会は産業の発展自体の基礎となっていることである (Macgregor 1911, 60-61)。

マグレガーの有機的成長論批判の特徴

本節ではこれまでの議論を踏まえ、マグレガーの有機的成長論批判に関して、彼が批判しようとしていた有機的成長論の内容と、その批判の持つ新たな視野 産業における移動性を強調

した「循環」概念を考察する。

1 「有機的成長」の意味

我々は節において、マーシャルが2種類の有機的成長に関する議論を提示していることを確認した。1つは大規模組織が発展してきたメカニズムを、有機体成長のアナロジーで理解しようとするものであった。有機体を構成する各部分の「分化」と「統合」が進行していくことが有機体の高度化に共通する特徴であるが、産業組織の高度化も同様な「分化」と「統合」という有機体の成長過程と同等の概念によって説明できるとした。

もう1つは「生活基準の向上」を軸に、人間の進歩と経済的進歩が累積的に進行するプロセスを有機的成長として描くものであった。人間の肉体的・知的・道徳的な向上を含む人間的進歩を表す「生活基準」の向上が労働の質や能率の向上を生み出し、その結果国民所得の増大とそれに伴う賃金の上昇、さらなる人間的進歩が生み出される累積的過程として経済成長のプロセスを理解するものであった。

マーシャルによるこれらの有機的成長論に関する議論と比較した場合、マグレガーの批判している有機的成長論は第一の大規模生産組織の発展に関わるものであることは明らかであろう⁷。産業の成長は経済活動において統一性をもたらすと同時に、それぞれの単位において産業活動の分化と専門化をもたらした、と彼は主張し、これを有機的成長の定義としている。これは、「分化」と「統合」を通じて高度な生命体が生じるという、有機体成長のアナロジーに基づく有機的成長の理解を表している。

2 有機的成長論批判の新たな視野 産業における移動性と「循環」概念の導入

一方マグレガーは有機的成長という概念に批判的であるが、その最大の理由として、それが高度に発展した産業において生じている階層化を容認してしまうという問題を指摘している。生命体が機能に関し高度に専門化されていると同時に一元化されているということは、有機体に関する完全な説明としては不十分であると彼は批判する。専門化が進行するとともにその内部に多くの小集団が形成されるが、それぞれが高度に専門化されているためにその構成員が1つの部門から他の部門に異動することは困難となり、これが産業内における階層を生み出す。そして不況や新たな技術進歩に伴う労働問題の多くが、この専門化によって生じているとマグレガーは主張している。

そしてもう一つの重要な点は、専門化による階層化の進行は労働者の新たな産業構造への適

7 これは同時に、マーシャルの有機的成長論のみならず当時の社会科学に大きな影響を与えた、スペンサーが提唱していた社会進化論を批判することも意味している。スペンサーは、進化が特化と差異化が増大する傾向を意味するとともに、この傾向がシステムのまとまりを保つうえで十分な機能的統合と結びついていることを示すことにより、自然の進化と社会経済の進化の双方に適用できる一般的原理を提起していた。詳細は Hodgson (1993, ch. 6) を参照。

応を阻害することを通じて、通時的な産業制度の高度化に関しても悪影響を与えるという点を指摘していることである。マグレガーは直接的に言及しているわけではないが、この問題はマーシャルが考えるもう一つの有機的成長のプロセス——人間の進歩と経済的進歩の累積的過程——に影を落とす可能性のあるものであり、そのような視点からの評価も必要であろう。

これに対し彼は、有機的成長論の基礎となっている有機的生命体に関する完全な理解のために、「循環」という考え方が必要であると論じる。生命体は血液循環に見られるような循環という過程により維持されているのであり、このことを考慮すれば産業もまたその内部での移動性を伴っていなければ、真に有機的生命体と同等のものとしては見なせないであろう。したがって、産業が有機体の成長と類似している点を指摘するだけでなく、生命体に必要な循環の原理という観点からその問題点を指摘することも必要である、と彼は結論している。

そしてこのような不完全性を克服する手段としては、(マーシャルと同様に)教育の重要性が指摘されている。教育の機会が産業発展の基礎であり、労働者が部門間を自由に移動する能力を高めるために不可欠とされるのである。

おわりに

マグレガーは、経済成長を「分化」と「統合」という有機体成長のアナロジーで説明しようとする有機的成長論に対し、これは生命体が部分や機能に関し高度に専門化するとともに統一化・一元化されているという有機体の一側面のみを強調することにより成立しているということ批判した。有機体は単に各部分が中心の共通部に支配されているのみならず、循環という過程により維持されているということ指摘し、これに対応した産業組織における高度の移動性という特性が明らかにされない限り、経済的な進化は有機体の進化と同一視できないということを明確にした。このような「循環」概念による有機的成長論に対する批判は他の論者には存在しないものであり、マグレガー独自の貢献であるということができよう。

ただしこの「循環」という概念をマグレガーがどのような形で着想した(あるいは他の論者の主張から導入した)のか、またこの概念が当時の生物学や進化論をめぐる論争の中でどのような位置づけにあったのかを確認することはできなかった。これは『産業の進化』が非専門家向けのテキストシリーズであることから⁸、原典や引用の明示がほとんど存在していないことに起因している。このことを正確に確かめることがマグレガーの主張の独自性をさらに明確にするために必要となるが、これは今後の課題としたい。

8 本書は Home University Library of Modern Knowledge という、政治、経済、文学、芸術等を含む広範なテーマを扱っているシリーズの1冊として書かれていた。マグレガーの著作が出版された1911年時点で133冊が出版されており、執筆者にはホブソン、ピグーなどの著名な経済学者も含まれている。

参 考 文 献

- Groenewegen, P. 1995. *A soaring eagle: Alfred Marshall, 1842-1924*. E. Elgar.
- Hodgson, G. 1993. *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*. University of Michigan Press (西部忠監訳『進化と経済学：経済学に生命を取り戻す』東洋経済新報社, 2003).
- MacGregor, D. H. 1906. *Industrial Combinations*. George Bell & Sons, Ltd., Reprinted by London School of Economics and Political Science, 1938.
- 1911. *The Evolution of Industry*. Williams and Norgate.
- 1949. *Economic Thought and Policy*. Oxford University Press.
- Marshall, A. 1879. *The Economics of Industry*. Macmillan (橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部, 1985).
- [1890]1920. *Principles of Economics* (8th Ed.). Macmillan (永沢越郎訳『経済学原理』岩波ブックサービスセンター, 1997).
- Pigou, A.C. ed. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*. Macmillan.
- Raffaelli, T. 2003. *Marshall's Evolutionary Economics*, Routledge.
- 2004. Whatever happened to Marshall's industrial economics? *European Journal of the History of Economic Thought*, 11(2): 209-229.
- Reisman, D. 1987. *Alfred Marshall: progress and politics*. Macmillan.
- 岩下伸朗 2001. 「マーシャル経済学の進化論的特徴について」『福岡女学院大学紀要. 人間関係学部編』(2), 1-9.
- 2008. 『マーシャル経済学研究』ナカニシヤ出版.
- 坂口正志 1990. 「有機的成長論」橋本昭一編著『マーシャル経済学』ミネルヴァ書房, 第7章.
- 下平裕之 2009. 「マグレガーとロバートソン 産業統治論」平井俊顕編『市場社会論のケンブリッジ的展開 共有性と多様性』第7章, 日本経済評論社.
- 西岡幹雄 1997. 『マーシャル研究』晃洋書房.
- 西沢保 2007. 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店.

D. H. Macgregor on Organic Growth Theory

Hiroyuki Shimodaira

This paper describes the criticism of the organic growth theory by D. H. Macgregor (1877-1953). In section 2, as a preliminary consideration, we describe briefly the theory of organic growth put forth by Alfred Marshall. Then in section 3, we explore the view of the organic growth theory by Macgregor. Finally, in section 4 and 5, we clarify the precise nature and contributions of his view.

Macgregor criticizes the theory of organic growth which explains industrial growth by applying a metaphor of organic life. He points out that it is not enough for the complete idea of an organism that there should be unity and centralization of life, together with great specialization of parts and functions. Then he stresses the fact that an organism has, not merely parts held together at a common centre, but a common life which is created by the processes of circulation.

His conclusion is that it is better not only to point out the ways in which industry resembles an organic growth - its great specialization, its high unification, and its great nervous interconnection - but also to point out how, in respect of the vital principle of circulation, industry does not show a great degree of likeness to what organic life resembles.